
IS <インフィニット・ストラトス> 妄想SS 『エロDVD編』

ゾダグア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS^インフ^イィ^ーット・ストラ^トス^ト・妄想^シ_シ『^トロロ^トト^ト編

【Zコード】

Z3544R

【作者名】

ゾダグア

【あらすじ】

周囲が女ばかりのHIS学園で、唯一の男の一夏くんはいろいろと溜まっているだろう。そんな妄想からスタートした超短編です。

2011年3月10日加筆修正。

(前書き)

この作品は『隠喩なじをふくめて性に関する情報や描写』がふくまれています。もし不快感を得られたらい、速やかに読むことを切り上げることを推奨します。

『インフィニット・ストラatos』
宇宙空間での活動を想定して作られた、マルチフォーム・スース。既存の兵器を凌駕する性能のため軍事利用されたが、現在はスポーツとしての戦闘に用いられる。また、女性しか使用できないという特性から、女尊男卑の風潮が起り、社会問題となっている。

infinite stratus

関連 I S 篠ノ之束

『太公望書林国語辞典第4版』（2007年）より

I S操縦者を育成するために設立された教育機関、公立『I S学園』。そのメインストリートから学生寮に至る道で、ただ一人の男子学生の織斑一夏は何かを探していた。

「いつたいどこに行つたんだ……」

彼は植木をかき分け、這いつぶばつてベンチの下を覗きこみ、出会った生徒には残らず声をかけて何かを尋ねる。

真剣というよりは狂気じみていた。とは、彼に話しかけられた2年生の生徒の言である。

実際、彼は狂気に陥つてもしそうがない状況だった。

「どこに行つたんだ、あのDVD……」

彼は、失くしたエロDVDを探しているのである。

話の発端は3日ほど前。いつも早起きな一夏が、いやに気分よく田覚めたことから始まる。

田覚めた瞬間にこそ気持ち良かつたが、意識が覚醒すると一夏はランクスの中身特に彼の分身の辺りに不快感を得た。それはひんやりとした、そして粘つこい感触。

「やべえ、漏らした……」

彼の名誉のために言つが、彼が漏らした“モノ”は尿ではない。

「急いで洗わないと……。」のまま洗濯になんか出したら、絶対に噂になつちまう

一夏はベッドから抜け出ると、急いで替えの下着を出して履き替える。そして脱いだ方を手に持つて部屋にあるシャワー室に駆けこんだ。

「筹やシャルが居た時だつたらヤバかったな……。しばらく抜いてなかつたけど、まさかこんなことになるとは」

ランクスの表裏をひっくり返して「じい」と水洗い。

しばらく蛇口の水を出しつぱなしにしていると、やがて粘性のある液体は流れ落ちたのだろう。一夏はコックをひねって水を止める。そして絞つて水気をきり、下着を浴槽の淵にかけた。

「さて、今は……つて、もうこんな時間かよー。」

慌てて着替えた一夏は部屋から駆けだして行つた。

この問題の発端となつた出来事、それは……夢精であった。

健全な15歳の男子なら、おかしな現象ではない。まあ、こうなる前に抜いておくことが普通なのだが、少し事情があったのだ。

授業では肌の露出が多いIISスーツを着た女子生徒に囲まれ、寮に戻ればラフな格好で同年代の少女たちが闊歩する。今でこそ改善されたが、一時は女子生徒と同室でさえあつたのだ。あの風呂あがりの独特的の色氣や、壁一枚さえ隔てないで行われる着替え。そして共に入浴したことさえあるのだ。“分身が勃つてしまい、治まるまで誤魔化す”スキルについては、今の一夏は世界でも随一かもしれない。

そして授業後にやつていてるIISの特訓も彼の内なる衝動に拍車をかけた。テストステロンなどと言つた男性ホルモンが関係するそうなのだが、医学的な説明は割愛する。

まあとにかく、彼は色々と溜まつていた。

× × × × × × ×

「ありがとうございました～」

それから数時間ほど後、自宅の掃除のついでに一夏はピンクな本屋に寄り、幾つかブツを仕入れていた。

ブツとは何かって？ 察しろ。

とにかく仕入れて学園に戻ってきたのは良いが、各国からの生徒を受け入れるために厳戒警備のI.S学園では入口で持ち物検査を行つてているのである。

「年頃の男ならじょうがないよな。頑張れよ、少年」

一応見えないようになに鞄の奥底に隠してはいたものの、バレないはずはない。

警備員さんの厚情を受けて没収を免れたものの、女生徒たちにブツを見られぬよう急いでしまったのがいけなかつた。一年生の寮に向かう道中で、一夏は一枚のディスクを落としてしまつた。

気付いたのは、彼の部屋である1025室で鞄の中身を広げた時であつた……。

× × × × × × × ×

「あら、何か落ちていますわね」

ところ変わつて学生寮の廊下。

一夏にとつて友人の一人であるセシリ亞・オルコットがディスクケースを拾つていた。

賢明なる読者諸兄にはおわかりだらうが、一夏のエロDVDである。女尊男卑の今のご時世では女性団体が変に力を持つてゐるため、

エロコンテンツは一見して中身が分からない仕様になつていて。それでもなんとなくパッケージングの雰囲気やら特徴はあつて分かることには分かるようになつていてるらしいが、お嬢さま育ち、しかも外国人のセシリ亞に日本のエロDVDの特徴など分かるはずもなかつた。

「落とした方は探していらっしゃるでしょうし、とりあえず事務にでも届けましょうか」

困つてゐる者に手を差し伸べるのは『貴族の務め』ですわ。などと考えてセシリ亞は事務室に足を向ける。

と、その時見知つた姿がやつてきた。

× × × × × × × ×

「シャルロット。日本には変わつた風習があるようだな

シャルロット・デュノアは友人の言葉に、思わず「は？」と返さざるを得なかつた。

「あちらで嫁が何かやつてゐるのだが、手伝つべきだらうか？」

友人 ラウラ・ボーデヴィッヒの視線の先を見ると、彼女らが好意を寄せる男子 織村一夏が地面に這いつくばつていた。

「え、と、何か探してゐるのかな？ 聞いてみようか

「そうだな

2人は小走りで一夏の下に行く。

「一夏～！」

「ん？ シャルリエラウラー～？」

呼びかけたところ一夏はえらく驚いているようだ。シャルロットが疑問に思つていると、ラウラが質問していた。

「嫁よ、地面に這いつぶまつて一体どうしたのだ？ 何か探索中ならば手伝つが……」

「探索……ああ。ちょっと探し物を、な。ちょっとティスクを落としちまたんだ。この位の大きさのケースに入つていいんだが、2人とも何か知つてないか？」

なるほど、落としものか。誰かのスカートの中を覗くとしているんじやなくてよかつた。でも、もしそうだったら僕のパンツを見せてあげても……。

一夏が聞いたら文句を言こそなことを考えたシャルロットだが、そんなことをおぐびにも見せずにラウラに話を振る。

「じめん一夏。そう言つた話は聞いてない。ラウラは？」
「私も聞かないな

彼女も心当たりはないようだった。

「もし知つている人がいたら、多分俺のだつて伝えてくれないか

一夏はなぜかほつとした顔をすると、そう言つて再び地面に這い

つぶやつた。

「私も手伝おう」「いや、大丈夫」「だが……」

なぜか手伝いの申し出を一夏は断り続けていたが、やがて折れた。

「わかった。それなら伝言を頼まれてくれないか。『決して、何が映っているのか見ないでくれ』って」

「わかった。しかし、一体何のデータが入っているのだ？」

ラウラの質問に一夏はすぐには答えなかつた。

「ちょ……ちょっと言いにくいものなんだ」

「気になるな。夫婦の間に隠し事は不要だろ？？」

シャルロットからしても気になる話だが、人にとって言いたくないことはある。彼女はラウラを止めることにした。

「ラウラ、一夏が困つてるよ？ きつと言いくらいににくいものなんだろうし、ここは引いてあげようよ」「もう……ならしかたないか」「見つけたら連絡するね」

謎を残しつつも、2人は一夏を置いて寮へと足を向けた。

× × × × × × × ×

「セシリアじゃない」

「あら、鈴さん」

セシリアが出会ったのは鳳鈴音^{ファンイン}。クラスこそ違うものの、一夏との関係で敵対したり共闘したりと、まあ友人と言つてもいい関係である。

「どうしたの、それ？」

「さつき廊下で拾いましたので、これから落し物として届けようか」と

「ふうん。なら、事務室か。途中まで一緒ね」

× × × × × × × ×

ほとんど幽霊部員となっていた剣道部に久々に顔を出した帰り、篠ノ之箪は廊下で後から友人に声をかけられた。

「箪~」

シャルロットとラウラ。共にある男を巡つて浅からぬ縁がある。箪は彼女達の下に歩いて行く。

「シャルロットラウラが。帰りか」

「ああ。ところで篠、ケースに収まつたディスクに心当たりはないか？」

「いや、私は見ていないが……。それは何のディスクなんだ？」

篠が訊ねると、シャルロットが少し困つたように答える。

「それが、よく分からんんだよね。

一夏が必死になつて探していたから力になつてあげたいんだけど『『決して、何が映つているのか見ないでくれ』』って、拾つた人に伝えほしいなんていうくらいだし、教えてくれなかつたんだよ」

なんだ、それは。それが一夏のものかわからないではないか。最初篠は呆れたものの、シャルロットたちの顔にも困惑の色があることから、彼女らもまた篠と同様なのだ。
3人はそのまま一緒に寮に向かつた。

× × × × × × ×

「あら、
「む」

一緒に事務室のある教職員棟へと向かつていたセシリ亞と鈴音は、恋敵3人と遭遇した。

「な、なぜ私に注目してらっしゃるのですか？」

3人はセシリアを、正確に言えば彼女の手にある「ティスクケース」に注目していた。

3人はなにやら少し牽制し合っていたようだが、やがて箒が口を開いた。

「そのケースはどうしたんだ」

「え、拾ったんですけど……どなたかお心当たりが？」

「ああ。たぶん一夏のだ」

瞬間、場の空気が凍つた。

セシリアと鈴音を除く3人はアイコンタクトだけで意志を通じ合わせ、彼女の抜け駆けを封じるために囲む。

「み……嘘をなんどつなさいましたの？」

セシリアはバレていなければ、彼女の足は方向を一夏の部屋へと向けていた。

「生憎だが、嫁なら外で探していたぞ。部屋にはまだ戻っていない」

ふつ……と、ニヒルな笑みを浮かべてラウラがセシリアを見下ろす。ラウラの方が身長は低いが、精神的には見下ろしていただろう。

「せっかくだから、返す前に見てみないか？」

5人は牽制し合っていたが、箒の言葉にセシリアとラウラは得心が行つたとばかりに手を打つた。

「や、やめておいた方がいいと思つよ」

「そりそり。きっと口クでもないことになるつて」

「うつ言つ時にストップーになるのは大抵がシャルロットだ。だが今日は鈴音も反対側に回つていた。いつもなら率先してやりそうな彼女の反応を4人は訝しむ。

「なんか、イヤな予感がするのよ。前に一夏ん家に遊びに行つた時、ベッドの下から……。み、見るなら勝手に見てよね。あたしは用事があるから。じゃあね！」

鈴音は何か誤魔化すようにその場から去つていく。
「、なると止めるのはシャルロットのみだ。だが残る3人の説得といつか、悪魔のさわやきに彼女も抗しえなくなつて……。

「それじゃあ、僕らの部屋で見ようか

と言つ事になつてしまつた。

× × × × × × × ×

「それじゃあ再生するよ」

シャルロットとラウラの部屋。機器の操作をするシャルロット以外の3人は各自ベッドに腰かけたり立つてたり床に座つたりと、位置はバラバラながらもテレビに注目していた。

「スタート」

シャルロットがリモコンの再生ボタンを押す。
数分後、廊下まで悲鳴が響き渡った。

× × × × × × × ×

「遅かつたか……」

探索を諦めて部屋に戻ろうとしていた一夏。
その途中で彼は、ちょうど部屋に戻る途中だった鈴音に恐るべし」とを聞いてしまった。

『一夏、あんたが落としたって言つトイスク、返す前にシャルロットとリカの部屋でみんなが見つて言つてたわよ。
つて、あんた何で工事を……きやーつ…』

その瞬間、一夏は白式を展開していた。
イグニッショングースト
瞬時加速を連発し、廊下を駆け抜ける。

廊下ですれ違った女子生徒のスカートはことりとくその風圧でめくらあがり、「イヤーン」と言つ悲鳴が上がる。まといっちゃんぐだ。後で必要になる始末書、謝罪の数々、そして姉による罰を理解しながらも、一夏は止まらない。なぜなら、あのD.V.Dの中身を知られた時点で彼は社会的に抹殺されかねないからだ。

『頼む。間に合え、間に合つてくれ……』

彼の脳裏でいやな思い出がフラッショバックする。以前遊びに来た鈴音によつてベッドの下にあつた本が見つかった時のこと。千冬に姉×弟物のDVDのパッケージを見られた時のこと。

彼女らの部屋がある部屋に到着した瞬間、一夏は悲鳴を聞いた。そして、部屋から飛び出す3人の少女の姿を見た。

篠ノ之箇、セシリ亞・オルコット、そしてシャルロット・デュノア。

『破廉恥だぞ一夏あああああつ！』

『不潔ですわ！』

『一夏のスケベ……』

彼女らは一夏の姿を認めるに即座にT-12を装着。武器を展開した。数分後、通報を受けた教師陣による鎮圧部隊は、ぼろ雑巾のように横たわる一夏と、彼を囮のように肩を怒らせて立つ3人の少女の姿を見た。

× × × × × × × ×

他の3人が一夏に私的制裁を加えていた頃、ラウラ・ボーデヴィ^{リンチ}ッヒは部屋でDVDを見続けていた。

頬が若干赤くなつてはいるものの、他の3人と比べれば冷静沈着。気になる個所は巻き戻してメモを取る程である。

なぜ彼女は（割と）平氣でエロビデオを見ていられるのか。それは、わだかまりが解けた黒ウサギ隊の部下達に恋愛の勉強だと言つ

て、ビデオを何本か見せられていたため、耐性があったからである。一通り再生が終わると、彼女はディスクをプレイヤーから取り出してケースに戻した。

「意外と普通だつたな」

一応内容について解説しておぐが、血の繋がりのない姉と弟が酔つた勢いでくんづぼぐれつするという話である。これがアニメや漫画なら、間違いなく某都知事が規制する内容。

もし一夏の趣味がいささかマニアックだった時のためにハードな内容の物を黒ウサギ隊の面々は用意したのだが、取り越し苦労だつたらしい。

一夏に犬や鞭を使う趣味がなくて良かつた。ラウラはほつと、たいらな胸をなでおろす。

「しかし、あの女優はやけに教官に似ていたな」

ぽつりとそう呟くと、彼女は急にうるさくなつた廊下の様子を見に行つた。

× × × × × × ×

それから何日か後。

治療を受けた後、ISの指定区域外での使用のかどで特別教育室での生活を余儀なくされていた一夏。彼が刑期を終えて部屋での就寝が出来るようになつた晩、ラウラが彼の部屋にやってきた。そし

て布団にもぐりこむと、彼の寝巻きのズボンを下ろさうとしたではないか。

「何するんだよ、ラウラ！」

「あの映像と同じ事だ。む、下履きが膨らんだな」

「それはヤバい、ヤバいって！」

軍体流の捕縛術を受け、ぐるぐる巻きの一夏。それでもパンツは守っている。

「安心しろ。夫婦なら普通だ」

「相手を縄で縛っていたす夫婦なんているか！」

居ないこともない。たぶん。

「私が以前見た物では大抵縛っていたぞ。鞭や犬の方が良かつたか

？」

「ラウラ、それ絶対間違ってる！！」

まあとにかく、一進一退の攻防で耐え抜いた一夏は、眠れない夜を過ごすのでしたとさ、めでたしめでたし。

おわり。

(後書き)

短いバカ作品ですが、最後まで読んでいただきありがとうございました。

筆者は現在就職活動中なのですが、IS^くインフィニット・ストラトス>にアニメから入ってはまり、ついつい原作を購入して短期間で書き上げました。そのためおかしな点も多々あると思います。よろしければ不満点などを感想としてあげてくださると、今後改善していく所存であります。

2011年3月10日本文を加筆修正。

2011年3月16日更に修正。鈴の苗字を間違えてました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3544r/>

IS <インフィニット・ストラatos> 妄想SS 『エロDVD編』

2011年4月21日16時07分発行